

No.J2224

「日本占領期上海の文学とメディア-『対日協力者』の文化活動」の出版

日本学術振興会特別研究員 PD (日本大学)

山口 早苗

2022年度の出版助成を受け、『日本占領期上海の文学とメディア-「対日協力者」の文化活動』（東京大学出版会、2022年）を刊行した。本書は、2020年度に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文「日本占領期上海文壇再考—中華日報社と中国文化人—」に加筆・修正を加えて一書にまとめたものである。

本書は、日本の占領地政権であった汪精衛政権／南京国民政府の機関紙『中華日報』を材料とし、中華日報社に集い、これまで「対日協力者」「漢奸」として否定的評価を受けてきた中国文化人の文学活動・思想の再検討を通じて、占領地上海の文壇状況を実証的に捉え直すものである。

本書では具体的に以下の二点について考察した。第一に、『中華日報』文藝欄を代表する「華風」（1939～1942年）、「中華副刊」（1942～1945年）という2種の刊行物を取り上げ、その特徴を明らかにした。第二に、中華日報社に集った文学者のうち、中心的な働きを行った陶亢徳、楊之華、蕭劍青という3人の編集者を取り上げ、戦時下におけるその活動を追うとともに、彼らの文学観や思想を明らかにした。

これにより、占領地政権である汪精衛政権の機関紙の内容の一部、そして中華日報社系列の新聞社で活躍した人々の行動・思想とともに、戦時期の上海文壇のありようの一端を明らかにできた。このことは戦時下上海を対象とする歴史研究に一定の貢献をしたと言えるだろう。今後は、文学研究・メディア研究と歴史研究のさらなる架橋・対話を進めていくことが望まれる。